生きる

北海道旭川北高等学校
校長通信・生徒版
NO１
令和２年５月 13 日

人間が人間らしく生きるためにともに学ぼう

希望



４ 月に学校再開後、登校８日で休校。皆さん、予防に努め健康に過ごしていますか。

今年諦めていた桜ですが、北高校門を入ってすぐ左にきれいに咲いているのを見つけました。皆さんにも「北高桜」をご披露します。

☆

人は有史以来、疫病・戦争・飢饉と闘ってきました。試練に対峙するたび、人は叡智を結集して乗り越え、時代を切り拓いてきたのです。私たちは太古から先人が脈々と受け継いできた現代のリレーランナー。今また力を合わせ、私たちそして未来のリレーランナーのため、目の前の難問を解いていきましょう。キーワードは「希望」です。

☆

ニューヨークでは７時に各家庭が窓を開け、医療従事者に対して拍手をする動きがあるそうです。イタリアでは外出自粛の中、ベランダでの歌声が合唱になるとの報道もありました。

互いを励まし合い「希望」の光を照らし合う姿。これこそ人間の知恵。

☆

皆さん、学校という環境から一時離れていますが、勉強を続けていますか。

私は先日、大学時代に買った「クオレ」という本を読み返しました。130 年前のイタリアの小学生の１年を日記風に綴ったものです。

統一されたばかりのイタリアで、子どもたちが様々な背景を抱えながら勉強する姿が生き生きと表現されています。病気で入学が遅れたガルローネはいつも弱い者の味方。鍛冶屋の息子プレコッシは、こつこつ勉強した努力が認められメダルを受賞。荒れていた父親がすっかり優しくなり仲の良い親子に。主人公エンリーコの家に遊びに来た左官屋の息子。服の汚れがイスについたのをエンリーコが払おうとすると、父親が制して「働いてついた汚れはきたないものではない」と優しく諭します。「クオレ」は「心」という意味だそうです。

働きながら夜学に通う大人たちの姿も描かれています。疲れた身体で居眠りしそうになるのをこらえながら学ぶ姿には、勉強の先にある「希望」が感じられます。そういえば同じ姿を東南アジアで何度も見ました。店先で働きながら勉強する若者の姿。アジアの若者は本当に勉強しています。

☆

ユネスコによれば、感染症拡大の影響を受け、世界で皆さんを含め 13 億人の児童・生徒が学校に通えていないとのこと。世界が闘っています。

「山笑う」春。命の大切さを思い、自分の自覚ある行動が 2 週間後の世界を救うことを心に留め、「希望」を掲げ学び続けましょう。私も校長通信を通し皆さんにエールを送り続けます。

生きる

北海道旭川北高等学校
校長通信・生徒版
NO２
令和２年５月19日

人間が人間らしく生きるためにともに学ぼう

今、わかりました！



「（因数分解の）解き方、わかった？」
「今、わかりました！」

分散登校が始まりました。家庭学習でわからなかったところも授業で解け、校舎に皆さんの笑顔が戻ってきました。引き続き感染予防に努め、目標を高く掲げ、学び続けましょう。”If you can dream it, you can do it.”（ウォルト・デイズニー）です。

☆

「心を整える」（長谷部誠著、幻冬舎）を読みました。元サッカー日本代表のキャプテンによる、心を「鍛える」のではなく「整える」56の習慣が紹介されています。

〇1日に30分必ず心を鎮める時間をつくる
〇マイナス発言は自分を後退させる
〇恨み貯金はしない
〇偏見を持たずまず好きになってみる

たとえば、就寝前30分はデジタル画面を見ず１日を振り返る。今日からできそうです。

何でも肯定表現に言いかえてみる。「自分は消極的･･･」ではなく「私は慎重な人間」など。国語力もつきそうです。

うまくいかないことを何かのせいにせず、自分の立ち位置をちょっと変えてみる。明日の天気をはじめ、世の中には自分の力では変えられないことが山ほど。変えられないものを恨んで思い悩むエネルギーを、どうすれば今より１ミリでも前に進めるか考える方に使えば、はるかに健康的で前向きです。

世界が経験したことのない非日常のさなか。今まさに「心を整える」とき。参考になるヒントがたくさん詰まった一冊です。

☆

天保年間（1830～1844）、江戸には800軒もの貸本屋があったと言われます。日本の識字率や教育水準をよく物語っています。当時、アメリカでは、日本を様々な角度から研究した結果、ペリーの日本遠征について国論が二つに分かれました。エキスプレス誌の賛成論に対し、ニューヨーク・デイリータイムズ誌が反対を唱えたのです。その後の歴史は皆さんが知っているとおりですが、もしかすると日本の学びの力が「黒船」の歴史を変えていたかもしれないと思うと、興味深いエピソードではあります。

Smell the flowers！　（心に花）

生きる

北海道旭川北高等学校
校長通信・生徒版
NO３
令和２年６月29日

人間が人間らしく生きるためにともに学ぼう

踏み出す



百花繚乱。北海道の一番美しい季節です。学校再開１ヶ月。体のリズムは整いましたか。

口元が隠れていても「おはようございます」のひとことでマスクの下の笑顔が見える人がいます。相手の１日も明るくする素晴らしい笑顔です。

登校途中に落ちていた水色の帽子を拾ってくれたのは２年生のルナさん。しらゆり幼稚園の園児のものとわかり、無事持ち主の許へ。言われたからではなく、役割でそうしたわけでもなく、ちょっとした優しさと思いやりの心をもって踏み出した姿に拍手。

☆

漱石の「夢十夜」の第六夜にある話です。

鎌倉時代に活躍した仏師運慶が仁王像を彫っている姿を語り手は夢に見ます。

「よくああ無造作に鑿（のみ）を使って、思うような眉や鼻ができるものだな」

独り言を言う自分に、傍らの男が言います。

「なに、あれは眉や鼻を鑿で作るんじゃない。あの通りの眉や鼻が木の中に埋まっているのを、鑿と槌（つち）の力で掘り出すまでだ。まるで土の中から石を掘り出すようなものだからけっして間違うはずはない」

☆

イタリアの彫刻家ミケランジェロも次のような言葉を残しているといわれます。

「すべて大理石の塊の中にはあらかじめ像が内包されている。彫刻家の仕事はそれを発見すること」

☆

月10冊の読書を自分に課しています。

人はいくつになっても不完全な存在。１ミリでも理想の自分に近づこうと、日々今の自分と葛藤しながら学び続ける。運慶やミケランジェロが素材の中に見たような完成形や正解があるわけではない。次の一手をどうするか。踏み出す勇気を持ち、自分の頭で考え、自分の手で、理想の自分を彫り続ける。



皆さんの今日の学びが「自分」を創ります。



「おらおらでひとりいぐも」（若竹千佐子著、河出書房新社）を読みました。「老い」とは「昨日できたことができなくなること」と表現する人もいます。主人公の桃子さん、74 歳は、上京して 50 年。ふとお国訛りの内なる声が聞こえてきて、ひとり、人生を振り返ります。小学 1 年で出会った「おら」ではなく、「わたし」という着飾った言葉は、いつまで経っても「いづい」。「主語は述語を規定するのでがす」桃子さんは「46 億年ノート」という地球の歴史を書きためたノートを持っていて時々読み返します。「おらどは途上の人なのだ」46 億年を思えば 74 年など一瞬です。今を生きる桃子さん。今秋、映画化されます。



朝、スタルヒン球場側に綿毛が飛ぶことがあります。磯先生にお聞きしたところ、ドロノキとのこと。30 万都市旭川の国道沿いにありながら、北高は自然に恵まれています。クチバシが互い違いのイスカなど野鳥も数多く来るようです。皆さんの目で北高再発見を。

☆

80 年前の先輩も

先日、北高の大先輩の皆さんとお話しする機会がありました。

「北高ラーメンというのがあって、よく食べました。ラーメンもうどんも同じつゆでね」

「金星橋が雨でよく流れてね。遠回りしたものです」

今年は創立 80 年の節目。歴史を繙（ひもと）くと、背景は異なりますが、創成期の先輩にも学びたくても授業が受けられなかった時代がありました。北高の前身、旭川市立中学校の開校（昭和 15 年）の翌年 12 月に開戦。徐々に戦況が緊迫の度を増し、1、2 ヶ月の間隔で授業と勤労動員（農村や工場で作業）が繰り返されていた様子が校史に綴られています。先輩が生まれた時代を懸命に生き、繋いでくださったバトンは今、皆さんの手に。

☆

40 年前の高校時代のことです。

家の事情を考えれば、進学は夢のまた夢。わずかな可能性は学費の安い学校。しかし理数が苦手で模試の数学は 0 点の連続。計算問題を 2、3 問解いたらあとは 100 分座っているだけ。とにかく 5 教科 7 科目の総点で何とかしようと、数学は「せめて 4 割」と割り切り、0 点だった模試を何度も解き直し、参考書の例題だけはできるように勉強。最後の模試は「判定不能」でしたが、だんだん合格できるとかできないとかではなく、**「やれるところまでとにかくやってみよう」**という気持ちになりました。失敗したってもともとです。

そうこうするうち、学んだものが頭の中で「つながった」と感じる瞬間がありました。結果、中 1 でつまずいた数学で 7 割。0 点だった私が、です。後に高校の時には考えもしなかった教職を志し今に至っています。

最初から「できそう」「できなさそう」と自分に値段をつけて踏み出さなかったら今はありません。迷う余裕もありませんでした。

☆

詩人ロバート・フロストに”The Road Not Taken”（選ばれなかった道）という作があります。「私」は整備された道ではなく草の生い茂った道を選びます。正解はありません。踏み出したら「選ばれなかった道」に戻ることなく自分を信じ全力を尽くすのみです。

生きる

北海道旭川北高等学校
校長通信・生徒版
NO４
令和２年７月27日

人間が人間らしく生きるためにともに学ぼう

照らす



22日の朝、７時15分。

「内積が･･･」「絶対値が･･･」

３年生の教室で自習していた数名の男子が教えあっている様子が聞こえてきました。前日の進路講演会も刺激になり、自習に向かう目にも気迫がこもっています。

☆

数年前のこと。

週の中日、気だるい水曜の早朝、私はある街で出張のためバスに乗っていました。車内は眠気と通勤、通学の疲れが相まって、どんよりとした空気。誰もひと言も発しません。

終点。ぞろぞろと表情もなく降りようとする乗客に、運転手さんからのアナウンスが聞こえてきました。

「皆様、本日は〇〇バスをご利用いただきありがとうございます。終点、〇〇に到着いたしました。今日は水曜日。毎日の通勤、通学、大変お疲れ様です。今日一日皆様がお元気で過ごされますようお祈り申し上げます。それでは行ってらっしゃいませ」

背筋が伸びました。

それまでの重い雰囲気は一掃され、バス内に心なしか生気がみなぎってきました。

他のバスでは聞いたことのないアナウンスですから、運転手さんが自分で考えてのことなのでしょう。ほんのちょっとの気遣いが、その時の利用客数十人の朝を明るく照らしました。私も下車する時に自然とこの言葉が出ました。

「ありがとうございました」

☆

「一隅を照らす。これ則ち国の宝なり」という最澄の言葉があります。

北高生諸君には、学びを生かし、世を照らす人になってほしい。そう願っています。



（定時制生徒総会）

時々、私の背中から「おはようございます」と挨拶する声があります。挨拶は「押し開く」という意味だそうです。心を押し開く挨拶にいつも感動しています。北高生の①アイコンタクト、②イヤフォンを外すマナーは（当たり前ですが当たり前が実は一番難しい）素晴

らしいですね。世を照らす光のひとつです。

定時制の中間考査の結果が回ってきました。どの教科で誰がどれくらい頑張っているか見るのが楽しみです。人は口に出さなくても皆さんの頑張りをよく見ているものです。



（新聞局の竹村君、小高君が取材に校長室へ）



（定時制４学年合同で「ドッジビー」）

☆

「あなたが母親の手料理を食べられる回数は、残り 328 回です」（上野そら、メゾン文庫）どきりとするタイトルです。ある日、主人公の目の前に自分にだけ見えるカウンターが現れ、毎日その数が減っていく。何の数字だろう？主人公が考えた数を減らさない方法とは？その数の本当の意味は？

「ブラックボーイ」（リチャード・ライト、岩波）”BLM”でアメリカが揺れています。作者の自伝的小説で、ちょうど 100 年前のアメリカの姿が描かれています。主人公は、同じ人間でありながら同等に生きられない時代に呻吟（しんぎん）しつつ、学ぶことで未来を拓く希望を見いだしていきます。

「フェイクニュースを科学する」（笹原和俊、同人選書）「エコーチェンバー」という言葉を聞いたことがありますか。人には「見たいものだけ見る」傾向があるようです。自分と違う考え方や価値観の違う人の意見にも耳を傾け、異なる視点からものを見る力を身につけたいものです。

先日、「1 日 4 冊」という高速読書家萩澤さんのお勧めの２冊を図書室から借りました。



ESS が５月の英語プレゼンテーションコンテストで発表する予定だった内容を校内で発表。テーマは「学校が所在する市町村により多くの観光客を誘致する施策」。松尾さん、澤田さん、宍戸さん、中澤さん、星さん、栞奈さん、純奈さん、前田さん、河端さんがパワーポイントを使いながら、旭川空港の国際線開設や、米どころ旭川に着目した田植え体験、田んぼアート見学、収穫体験などで海外客を誘致するなどのアイデアを英語で発表しました。取材の汗と思いの詰まったプレゼンテーションに拍手。瑞々しい発想がいつか世を照らす日が来るのを楽しみにしています。

☆

先輩たちの生きた時代－創立 80 周年の年に

厚生労働省の資料によれば、1947 年（昭和 22 年、本校創立８年目）の 20 歳の平均余命は 40 年から 44 年。当時の若者は、人生をおよそ 60 年と捉えていたであろうことがわかります。先輩たちに未来がどう見えていたか知ることはできませんが、グローブも何もない状態から始まった野球部が２年目に全道出場、バスケットボールやバレーボールでも華々しい活躍など、母校の道を拓きながら懸命に「今を生きる」姿が伝わってきます。

☆

水泳の池江璃花子さんが練習を再開。「私は、どんな自分自身も受け入れて前に進んでいきたい」頭が下がります。７月最終週も元気に。

生きる

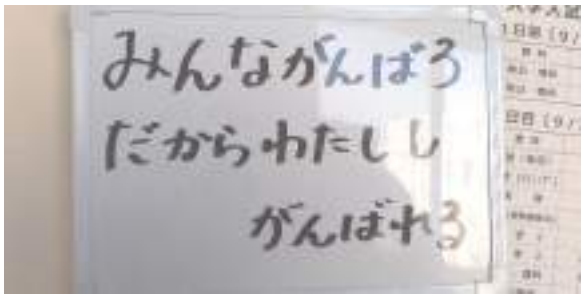
北海道旭川北高等学校
校長通信・生徒版
NO５
令和２年９月 14 日

人間が人間らしく生きるためにともに学ぼう

背中を押すことばを



１０日、定時制通信制生徒生活体験発表大会が行われ、１年生鈴木優慈朗さん（「将来の夢　夢をリアルに」）、３年生神田美怜さん（「辛い経験を糧に」）が北高代表として発表。神田さんは「厳しい境遇にあっても信念を持って頑張れば」と力強い発表で見事最優秀賞を獲得。鈴木さんも原稿に一度も目を落とさない熱弁。過去の自分を乗り越え、新しい自分に向かう姿を生きた言葉で綴った 12 名の発表はすべての人へのエールに聞こえました。



若い感性にはいつも学ばされます。

３年生の教室にあったこの言葉に足が止まりました。どんな名言もかなわない今を生きる言葉の瑞々しさに心が共鳴します。背中を押される人も多いのでは。

☆

１年生探究学習夏休み課題「情報収集と分析」優秀作が２階廊下に貼り出されました。

「授業中寝る生徒を減らすために」
「芳賀先生の話を面白くするために」
「世界中の人がみんな幸せになるために」
「演劇部に人を入れるためには」
「戦争が起きないようにするために」
「日本の財政を黒字にするために」
「『体育座りで話を聞く』を改善する」
「発展途上国の生活を良くするために」
「ぼくが高身長になるために」
「大人と高校生の恋愛観の違い」
「ホロライブを布教するために」
「ガルパを全曲 All Perfect にするために」

切り口に個性があり面白く読みました。歴史の曲がり角にはいつも若者がいる。本当だ。



早稲田大学庭球部には「この一球は絶対無二の一球なり」という教えがあります。テニスの世界ではよく引用される有名な言葉です。松岡修造さんは、ウィンブルドンでマッチポイントまであと一本という場面でこの言葉を叫びサービスを打ち勝利したそうです。

「徒然草」の「ある人、弓射ることを習ふに」の段で、二本目の矢を当てにして一本目をおろそ

かにしてはいけないと戒めています。

明日ありと思う心の仇桜（あださくら）
夜半（よわ）に嵐の吹かぬものかは

親鸞が詠んだといわれる和歌です。桜は明日見ればいいと思っていると、夜中に嵐が来て散ってしまうかもしれない。機を逃さず今を大事にせよとの戒めです。

いつも「明日からやろう」と言い訳していた私の勉強の難敵はギターでした。ある日弦を外してギターと決別。今ならスマートフォンでしょうか。



先輩たちの時代－80 周年の年に

9 期生鈴木紀明さんの創立 50 周年時点（1990 年）での 30 年後の北高像：制服廃止、教室はカラフルな服装で華やいだ雰囲気で勉強している。男女共学が女子校に。学校の名称が変わっている。中高一貫になっているのでは。野球で全国制覇。

＊　＊　＊

新旧北高生気質 100 人アンケート（平成 7 年時点で 20 年以上前に高校生だった同窓生にアンケート）

一番嫌な校則①坊主頭②3 年に一度の学校祭③休日でも制服④質実剛健

ミュージシャン①ビートルズ②ジョーン・バエズ③ベンチャーズ④エルビス・プレスリー⑤シュープリームス⑥タイガース⑦テンプターズ⑧加山雄三⑨西田佐知子

好きなマンガ①チッチとサリー②巨人の星③あしたのジョー④忍者武芸帳⑤ちかいの魔球

愛読書①嵐が丘②大地③聖書④斜陽

皆さんは 100 周年の後輩に何を語りますか。



【本の紹介】「考えるとはどういうことか－0 歳から 100 歳までの哲学入門」（梶谷真司、幻冬舎新書）

「考える」ことは当たり前とされているが、その方法を学ぶ機会は「人生においてほとんどない」と東大教授の梶谷氏。「考えること」とは、他の人との対話であり、「ともに問い、考え、語り、聞く」こと。氏が提唱する「哲学対話」に８つのルールを掲げています。

⑴　何を言ってもいい。
⑵　人の言うことに対して否定的な態度をとらない。
⑶　発言せず、ただ聞いているだけでもいい。
⑷　お互いに問いかけるようにする。
⑸　知識ではなく、自分の経験にそくして話す。
⑹　話がまとまらなくてもいい。
⑺　意見が変わってもいい。
⑻　分からなくなってもいい。

わからないことがあれば、それだけ問うこと、考えることが増える。だからどんどんわからなくなるのがいいのだそうです。何か安心しますね。



（８月 10 日、吹奏楽特別演奏会）

「人は信じられる」

教員試験に受かったものの「このままの自分ではダメだ」と、九州をヒッチハイク。夜中に「15 分だけ」と言って乗せてくれたのは年下の青年。重低音の音楽が響く真っ赤な車が停まり、パンチパーマの顔が見えた瞬間「厄介なことになった」と思いました。病院勤めの彼は一日の疲れを癒やすため夜の街をドライブ中。「へぇ、先生になるんですか。いい先生になってくださいね」話せば純朴な若者です。途中で「おなかすいたでしょう」と弁当を買ってくれ二人で食べました。「何で見ず知らずの人間にこんなに優しくしてくれるんだろう」と胸が一杯に。15 分の予定が２時間にもなり、青年は夜中３時まで次の車を一緒に停めてくれました。別れ際、トラックの運転手に「この人、お願いします」と頭を下げ、私には交通安全のお守りを。「人は信じられる」と実感しました。37 年も教職を続けているのはこの青年のお陰です。

生きる

北海道旭川北高等学校
校長通信・生徒版
NO6
令和２年11月10日

人間が人間らしく生きるためにともに学ぼう

つながり続ける



「テーマは“青春”！」

10月の遠足の朝、出発を待つ３年生に宮﨑先生から楽しい「ミッション」が課されました。「写真部の写真甲子園特別賞受賞記念、思い出増量企画、写真コンテストを行います！」「遠足を楽しむクラスの姿をできるだけ多く。担任も写っていると高得点」“青春”という直球のテーマにも感動しましたが、そのボールを目一杯楽しんで投げ返す姿に「これこそ北高生」と胸が熱くなりました。

☆

屈せず

霜月。黄金色のイチョウが美しい季節。時々、歩道の落ち葉を拾って校長室に飾っています。先日、カシワの葉を見つけました。カシワは冬でも葉を落とさず、新芽が出るまで葉を残す逞しい木。

非日常が日常になって９ヶ月。今一度、新型感染症ウイルスが「人と人を切り離す」というメッセージを発していることを思い出してください。

心がけることは、予防の手立てを怠らないこと。もう一つは、感染を噂の種にするのではなく、苦しむ人や不安な人に対するいたわりや思いやりを持ち、人と人のつながりを切らないこと。誰でもかかりうることを心に留め、冷静に。朔風に屈しないカシワの葉のように、私達もウイルスが放つメッセージに屈しないことです。

☆

RBG

アメリカで最高裁判事補を長く務めたルース・ベイダー・ギンズバーグさんの訃報が大きなニュースになりました。意見を異にする人とも良好な関係を築いていたという豊かな人間性で、人々に尊敬されていたそうです。子どもの頃から母親に、”Be a lady.　Be independent.”と教えられたとのこと。「人生の主人公になりなさい」という願いが、彼女の生き方を支えていたのでしょう。

☆

“Tax us.”（われらに課税を）

国際NGOの調査によれば、世界の富豪2153人が持つ財産は、貧困層46億人の総資産を上回るとのこと。新型ウイルス感染症に苦しむ世界に心を痛めた83人の長者が「私たちに課税を（So please. Tax us. Tax us. Tax us. It is the right choice. It is the only choice.）」と発信（ミリオネアズ・フォー・ヒューマニティ）。ディズニーの一族も含まれているようです。”Humanity is more important than our money.”（お金よりも人間らしさ）というWEBページの言葉に人の心に共通する温かさを見ます。



先輩たちの時代－80 周年の年に

・昭和２１年度新入生代表宣誓

「宣誓　此度私共百六十八名ノ者ハ多クノ志願者ノ中カラ選バレテ入学ヲ許可サレマシタ　見ハルカスモノ皆清カナル此ノ景勝ノ地デ勉強シ又運動スルコトガ出来ルト思フト私共ノ喜ビハ言ヒ表ス言葉モアリマセン　一旦入学シタ以上ハ諸先生ノ教ヲ守リ上級生ヲ模範トシ旭川市立中学校ノ名声ヲ益々挙ゲルヤウ努力致シマス　右宣誓致シマス　昭和二十一年度新入生代表　縄田　宏」

・「北高界隈・昔々物語」（2001 年同窓会誌より）

学校の裏の商店：仲間内では「パンチ屋」と呼ばれ飲料等の調達に大変重宝しました／学校の裏の商店、う～ん何ていったっけ。でも学校帰り、部活帰りにみんなで飲んだ「ＲＣコーラ」の味は不滅です。安くて量が多くて、冷たくて･･･

護国神社：クラス写真を撮ってましたねぇ。北高の名物セーターを着て。今もクラス写真を撮っているのだろうか。そういえば、当時の男子はみんな長髪でした。

みずほ通り：「千秋」の味噌野菜ラーメンはとても好きでした。学校帰りにしょっちゅう食べに行きました。



【この一冊】「先生のお庭番」（朝井まかて、徳間書店）

阿蘭陀（オランダ）の商館医として出島に居を構えるシーボルト先生。奥方はお滝さん。研究のための薬草園を作ることになったのは、奉公先から気の進まないまま送り出された 15 歳の熊吉。日本の四季と自然が、どの国よりも豊かなことを先生の言葉で知る。他国では見られない鮮やかなアジサイに、先生は妻の名にちなみ「オタクサ」と学名をつけた。自然の美しさや、職人熊吉が受取手の喜ぶ顔を思い八方手を尽くす誠実さが描かれており、改めて日本の素晴らしさを感じた一冊。

☆

【たまに洋楽を】トゥルーカラーズ（シンディ・ローパー）

「悲しそうな目をしているあなた。くじけないで。あなたの本当の色をわかっているから」34 年前、異彩を放つメイクとファッションでデビュー。世をあっと言わせたシンディが、一転、語りかけるように「自信を持って自分を出して」と人々を勇気づける応援歌を発表。東日本大震災の直後、いち早く募金活動を行った大の親日家でもある。



「だからなに」

私は共通一次（センター試験の前身）の２年目に受験。「国公立の定員が約9万人だからとにかくその中に」と大きく捉え勉強しました。講習も塾もない環境。最後の模試は「判定不能」。他に選択肢がなかったので、迷っている暇は無し。「（判定不能でも）だから何だ」という開き直りです。

「お寺の掲示板大賞」というページで、入賞作に「だからなに」があるのを見つけました。

「大丈夫だよ　生きていけるよ」
「お寺の前に“初心”をお忘れの方がおられます
　お心あたりの方はぜひお寺にお参りください」
「また失敗　またまた失敗　だからなに！」
「ボーッと生きてもいいんだよ」
「隣のレジは早い。」

ちょっとほっとする言葉です。緊張する毎日に心の充電。言葉はこういうふうに使わなくては。



開校当初を偲ぶもの

６日と７日は、本来であれば北高の 80 周年記念講演と式典が行われる予定でした。北高の歴史を振り返る質問を一つ。皆さんが時々目にするもので、創立当初のものが残っています。それは何でしょうか。わかった諸君は校長室までどうぞ。

生きる

北海道旭川北高等学校
校長通信・生徒版
NO7
令和２年12月１日

人間が人間らしく生きるためにともに学ぼう

１アウトずつ



（３年生掲示板）

35 歳からジョギングを始めて何度かフルマラソンに挑戦しました。大会に出て実感したことがあります。**自分で限界だと思っているそのずっと先に本当の限界があるのではないかということ。**

膝が痛い。脇腹が痛い。カンカン照り。土砂降り。万全で走れることはまずありません。ランナーズハイを１レースで２回感じたこともあれば、時間超過で強制的にバスに乗せられたことも何度もあります。走っている最中は、ほとんど「走りきれるのか？」という弱気との闘いです。

ある年、10 キロ地点で膝が痛くなり、**「もう限界だ」**と思いながら集団に引きずられて棄権のタイミングを計っていました。「あの角まで走ったらやめよう」と思うものの、そこでやめる自分が許せない気持ちもある。もう少し走ってみようか。5 キロごとの距離表示にたどり着くまでが長い。足が出ない。どんどん抜かれる。でも本当にやめていいのか？沿道で応援の拍手。声援が聞こえるとカラ元気でも体がしゃんとする。爪先を見ながらとぼとぼ走る。そうしているうちに 25 キロ、30 キロ。「ここまで来たら行けるところまで」と開き直る。気のせいか膝の痛みも和らぐ。39 キロの関門を時間内に通過したら、あとは何が何でも完走するしかない。最後は両脇の「ガンバレ」の声に背中を押され、膝の痛みを振り切ってゴール。「だめだ」と思ったのに完走できた自分に涙が出る。なんだ、10 キロで限界だと思ってから 30 キロも走ったじゃないか。「限界」なんて自分が勝手に思い込んでいるだけなのかもしれない。



（借り物借り人リレー、定時制体育大会）



（吹奏楽部、OPEN DAY）

鴨川の水に山法師、さいの目

白河法皇が挙げた、意のままにならない「天下三不如意」。時の権力者にも、京の鴨川、僧兵やサイコロは言うことをきかないとの嘆きです。

新手のウイルスもなかなか手強い。

勝利の極意は基本にある。マスク、手洗い、換気、消毒を確実に。「1アウトずつ」とっていきましょう。



（交通安全指導）

先輩たちの時代ー北高 80 周年

・1 年生は 12~3 歳。5 年生は 17~8 歳。ガキと大人の違いがあった。入学した途端に、5 年生が竹刀を持ってきて全員正座させられ、市中（いっちゅう）魂というのをたたき込まれた。何を言われたかは覚えてないが、恐ろしかったことだけはしっかりと記憶に残っている。（市中 5 期石原正敏氏、1999 年同窓会誌より）

・堀水先生の「大きくなったら何になる」昭和 18 年、1 年の時である。日本歴史の先生は、後にあの天下の実業高校を起こした堀水孝教先生である。「大きくなったら何になる」と質問を、片端からしていった。「陸軍大将」「海軍大将」「総理大臣」等の答が大半であった。その時副級長であった鍵谷幸信（のち慶応大学教授）が「医者になる」と答えた。先生は「医者になるとは何たることかー」と叱った。だが待てよ、これはおかしい全部が全部大将になったら兵隊はいなくなる。（雑記帳、50 年誌より）

・北高は「ゲタ高」と呼ばれてきた。ゲタは当時、男子生徒の男らしさの象徴であり、秋から冬にかけていつまで下駄をはき続けるか、また春はいつからゲタを履き登校できるか、強さを誇示するため見栄を張っていたものである。（11 期杉山允孝氏、1997 年同窓会誌）



（理科実験研究部、科学教育貢献及び実践団体表彰）

【この一冊】『ペリー』（佐藤賢一、角川書店）

「黒船来航」をペリー側から見た一冊。ペリーが実際に久里浜に上陸するとき、旗艦サスケハナ号から 13 発の号砲。脅しともいえる強硬な姿勢で開国を迫るペリーですが、聞くべきところは聞き、容れられないところは明確に断る堂々とした交渉役の姿に、徐々に日本に対する見方が変わっていきます。また、好奇心旺盛で、誠実な人々の様子にも他国民との違いを感じます。最終章に「吉田寅次郎」が登場。条約を結んだ日本の国法を破るのは不誠実と、ペリーは乗船を断ります。歴史を複眼で見る面白さがありました。

☆

【たまに洋楽を】『ピアノマン』（ビリー・ジョエル）

場末の酒場。昔を懐かしみ「一曲頼むよ」と老いた男性。自称小説家で不動産屋のポール。海軍一筋のデイビー。酔客の中で人あしらいを覚えていくウェイトレス。皆心に秘めた夢を持ちながら現実を生きている。ジョークを飛ばし愛想良く店を切り盛りするジョンが真顔になって言う。「ここを抜け出せれば、映画スターにだってなれるのだが」ピアノマンの曲が、週末の夜集まる客の心を癒やしてくれる。一人が言う。「でもあんた、何でこんな所でくすぶってるの？」

九州を２週間旅していたとき、家のない人たちと駅のベンチで寝たことがあります。皆夢があったはず。「いつか」を思いながら人は今を必死で生きている。この歌は今を生きる人への応援歌です。

☆

緑のネクタイをしています

生徒指導に明け暮れていた 30 年前、隣の先生に「緑を着たら」と薦められました。「気持ちを静める色だから」とのアドバイスに、以来、必ず緑色を身につけるようにしています。寺田先生も緑をよく身につけていらっしゃいます。皆さんもハンカチなど時々緑にしては。

生きる

北海道旭川北高等学校
校長通信・生徒版
NO８
令和２年 12 月 21 日

人間が人間らしく生きるためにともに学ぼう

前へ



（15 日、生徒会による打ち上げ花火）

アヌスミラビリス(Annus Mirabilis)は、ラテン語で「驚異の年」という意味。1666 年、第二次英蘭戦争、ロンドン大火、ペストの流行が重なる苦難を耐え抜いた祖国英国を讃えた詩が、詩人ドライデンによって書かれた「驚異の年」。

☆

「君たちは“奇跡の世代”だ」

「私達はコロナ世代と言われるのでしょうか」とうつむきかけた部員に、須藤先生からのエール。８月の特別演奏会で披露されたこの言葉が心に残っている。言葉の持つ力は大きい。

☆

今、医療に従事する方々が前線で懸命に闘ってくださっている。市内のある病院の Web ページには現状は「過酷」とある。使命感だけでは支えきれないほど状況は深刻。**緩みなく予防に万全を尽くすことが、自らを守るとともに医療への感謝とリスペクトにも繋がる。人を救うのは人しかいない。**

☆

「ウィズコロナ」という言葉だけでは力は出ない。英語圏にはそのような表現は今のところ見当たらない。気を引き締めつつ、前向きな言葉、力ある言葉で、人と繋がりあうことが今なすべき事。

☆

北高には看護師をはじめ医療を志す生徒が多い。「人のため」という尊い気持ちを特にこの状況下心強く思う。世界は若い力を待っている。

☆

受験生諸君へ。

受験の極意は、解ける問題を確実にとること。「この２点が境目」という気持ちで。「チーム北高」で団体戦の意識を忘れず、まさに 2020-2021 を目標突破の「驚異の年」にしよう。



（12 月 1 日全日 2 年探究ﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝ）

◇「バイオトイレを利用した衛生的な環境作り」

水道設備のない場所でも力を発揮するバイオマストイレをアフリカで普及させ、５歳までの死亡率を改善させたい。（工藤真綾さん、小川真奈さん、石田英乃さん）

◇「IT化が進む社会は果たして幸せなのか～医療の視点から見て～」

100 年後には病院がなくなり、一家に一台のロボットがその代わりを果たす。しかし便利さだけを追求するＩＴ化でいいのか。（斉藤琴美さん、野村明日風さん、加藤なご美さん、大居励さん）

◇「無料塾をつくる」

「是非実現したい。皆の協力を」（石川瞬也さん、細見沙羽さん、遠藤優珠さん、竹内心優さん）

始めに「なぜ取り組むのか」をしっかり話し合っていたことが光る。**「どんな大人になりたいか」「幸せとは何か」「なぜ勉強するのか」**という正解のない問いに対し自分達なりに答を見いだし、そこを起点に探究に取り組み、より良い解を追求し続けた姿勢が素晴らしかった。次代に必要な力。

☆

先輩たちの時代－80 周年の年に

・早いもので、我々18 期も卒業 50 年の招待期となりました。高校在学時代は 10 クラス 500 名以上の大軍団でしたが、この 50 年間で１人減り、２人減りと少しずつ規模が小さくなってきています。しかし、同期の結束は数ではありません。18 期は最後の一人になるまで“仲間たち”として、世のため人のため、そして、何かとお世話になった旭川北高の発展のために、惜しみなく力を尽くしてまいります。（旭川北高 18 期生存者一同）（平成 29 年同窓会だより）

・甲子園出場：キャプテン　木全克仁氏：「私たちは野球をするために集められたチームでもなく、甲子園出場を期待されたチームでもありません。ただ野球の大好きな高校生が偶然出会ったチームです。」「試合は３対６で負けてしまいましたが、甲子園とは決して手の届かない存在ではなく、自分たちのやってきたことは間違ってはいない。全国を見て大きな自信になりました」（2005 同窓会誌）



（11 月 12 日定時体育大会）



（12 月 18 日定時ｳｨﾝﾀｰﾌｪｽﾃｨﾊﾞﾙ「天気の子」）

【この一冊】『五重塔』（幸田露伴）

大工の腕はいいが、頑固一徹で世渡り下手な十兵衛。五重塔の建立があることを知り、一世一代の仕事を是非やりたいと思う。しかし、源太がすでに寺から委託されていた。後から割り込んだ上、気遣う人の気持ちも解さぬ不器用で、周りを困惑させる。結局、寺の住職の取りなしで十兵衛が建立することに。鬼気迫る職人魂。嵐の夜、塔は……。テンポよい語りが心に残る。

☆

【たまに洋楽】『ボクサー』（サイモンとガーファンクル）

故郷を出てニューヨークに向かう少年。職を求めるが働き口はなし。都会の冷たさが身にしみ、家が恋しい。人は皆、リングで闘うボクサーのよう。敗れた試合を思い返し、怒りと恥辱の中で「もうやめてやる」と叫びながらそれでもリングに立ち続ける。人生というリングで闘う人の応援歌。

☆

吉野弘の「止」戯歌（ざれうた）。＜「歩」は「止」と「少」から出来ています。 歩く動作の中に 「止まる」動作が ほんの「少し」含まれています＞。少し止まってまた歩きだす。「自分は進化しているのか？」と思う日もあるかもしれないが、働きかければ後退はない。自分を信じて、前へ。

1月15日、元気で顔を揃えよう。

生きる

北海道旭川北高等学校
校長通信・生徒版
NO9
令和３年１月 15 日

人間が人間らしく生きるためにともに学ぼう

I’m possible



（「団体戦」）

「ローマの休日」で世界を魅了し、後にユニセフ親善大使として活躍したオードリー・ヘップバーンの言葉。華奢な体のどこにその強さを秘めていたのか、人の心を動かす言葉をいくつも残している。

Nothing is impossible, the word itself says “I’m possible”！（不可能なことなどありません。Impossible という言葉の中に「私はできる」と書いてあるのだから）

☆

丑年の始めに、高村光太郎の詩「牛」を贈る。

牛はのろのろと歩く
牛は野でも山でも道でも川でも
自分の行きたいところへは　まっすぐに行く
牛はただでは飛ばない
ただでは躍らない
がちりがちりと
牛は砂を掘り土を掘り石をはねとばし
やっぱり牛はのろのろと歩く
牛は急ぐことをしない
牛はカいっぱい地面を頼って行く
自分を載せている自然のカを信じきって行く
ひと足ひと足 牛は自分のカを味わって行く
ふみ出す足は必然だ
うわの空のことではない
是が非でも出さないではたまらない足を出す牛だ
出したが最後　牛は後へはかえらない
そして　やっぱり牛はのろのろと歩く
牛はがむしゃらではない
けれどかなりがむしゃらだ
邪魔なものは二本の角でひっかける　牛は非道をしない
（後略）

穏やかに草を食む牛。機敏ではないが、その一歩には確固とした意思を感じさせる。「ふみ出す足は必然だ」の歩みを続けたい。（ｺﾞｼｯｸは鈴木）



（花火の前の雪かき、12 月）

団体戦は時に奇跡を起こす

23 年前の冬季長野オリンピック。ラージヒル団体。４年前、エースである自分のジャンプで頂点を逃した原田雅彦。アンカー舟木を見上げ「ふなきー」と呼ぶが、声にならない。原田の１本目は、雪で前が見えない最悪のコンディションの中、79.5 メーター。悪夢が頭をよぎる。１本目の終了時点で降雪が激しくなり、続行か中止かを役員が協議。このままだと４位が決まってしまう。

しかし２本目を可能にしたのは、オリンピック

出場を果たせなかった25人のテストジャンパー達だった。全員が無事飛べば続行。一人でも転倒すれば打ち切りが決まる。競技が続行できることを証明するために、恐怖と闘い飛び続けた。

彼らの心意気に応えるように、２本目、岡部、斉藤が大ジャンプ。原田も137メーター。舟木が重圧をはねのけ、見事日本に金メダル。名前も呼ばれず、映像に出ることもないテストジャンパーが、出場選手４人を信じて支え、共に起こした奇跡。夢は自分のものだが、志（こころざし）は共に抱くもの。人はすごい力を秘めているものだ。

12月。打ち上げ花火を成功させた石川生徒会と雪かき、雪踏みにひと肌脱いだ諸君の「団体戦」も見事だった。見事すぎて空が一瞬霞んだ。

☆

人間に白目が発達した理由は

京都大学前総長の山極壽一（やまぎわじゅいち）氏は霊長類学者。ゴリラにない白目が、なぜ人間には発達したか。森の中で生活するサルは、常に外敵との戦いにさらされている。視線を知られることは、命を脅かす問題になる。人間は、白目を見ることによって、相手の内面を読み取り、コミュニケーション力を進化させてきたのだそうだ。

また、昨今活用されるオンラインで人は「つながった」と感じるが、信頼関係までは築けない。共感する関係を作るには、視覚や聴覚だけでなく、嗅覚、触覚、味覚が必要なのだそうだ。

オンラインでつながるしかない場面もある。ならば、「体温」のある言葉でつながりあうのが人間の知恵というもの。

☆

先輩たちの時代－81周年の年に

・塚田訓子さん（39期）医療法人社団シリウスアトラスレディースクリニック理事長：医師の仕事は体力勝負です。勤務医時代は一晩の当直で７件のお産をとったこともあります。帝王切開はもちろん子宮外妊娠や卵巣腫瘍破裂など深夜の緊急手術も多く、自宅のベッドで眠れる日は月に５日あればいい方でした。辛いこともたくさんありましたが、元気に赤ちゃんが産まれてきたときの喜び、病気が治って退院する患者さんの笑顔を見るたびにこの仕事を選んで良かったと思ったものです。（2015年同窓会誌）

・太田有香さん（48期）ピアニスト　今の北高生にも、絶対に夢を諦めないで欲しいです。もちろん、夢見るだけではいけませんが、最後まで諦めなければ、いつか結果は出ると思います。（後略、2004年同窓会誌）

雑記帳　昭和22年５月、旭川市営球場は名門旭川中学（現東高）と市中の試合の熱気に包まれていた。（中略）旭中と市中は旭川では早慶戦のようなもので、市中同期の越前屋ー石井のバッテリーと大谷、高桑などの強力打線で相手をリードしていた。（50周年記念誌）



（定時制生活体験発表大会、９月）

【この一冊】『ライ麦畑でつかまえて』（J.D.サリンジャー著、野崎孝訳、白水Ｕブックス）

成績が振るわず高校を退学になるホールデン。あんなに嫌いだった学校も、去るとなると別れがたい。思いつくままに友人や先生に電話をするものの、会うとまた人の嘘や大人の建前が目について再会をぶち壊してしまう。凍えるニューヨークの公園の池で、アヒル達はどうしているのだろう。弱い者に優しい目を注ぐ少年の心がのぞく。原題は”Catcher in the Rye”（ライ麦畑の捕手）。英文科に進む諸君は必ずどこかで出会う作品。

☆

【たまに洋楽】『ユー・レイズ・ミー・アップ』（ケルティック・ウーマン）

フィギュアスケートの荒川静香さんがトリノオリンピックで使った曲。「あなたがいるから強くなれる」という歌詞は、世界中の人々を勇気づける。

☆

しばらくは　離れて暮らす　コとロとナ

つぎ逢ふ時は　君といふ字に

イラストレーター、タナカサダユキさんの短歌。謎解きできましたか。



進路実現への道。迷わずゆけ。I’m possible.

生きる

北海道旭川北高等学校
校長通信・生徒版
NO10
令和３年３月 23 日

人間が人間らしく生きるためにともに学ぼう

共鳴



（2月28日18時1分、卒業生を待つ教室）

２年６組の千葉琢磨さんが、１月の放送講話（「春は確実に近づいている」）への感想を学級日誌に寄せてくれた。２年１組の平井京輔さんがある朝生徒玄関に現れ、黙って一緒に雪かきを始めてくれた。後日、１年２組の本間湊さんが「お手伝いしましょうか」と声をかけてくれた。１月29 日に行われた定時制「卒業生を送る会」の準備で、在校生全員でてきぱき机や椅子を並べ、飾り付けを行い、始まる前にもう温かさが伝わってきた。朝、校門から国道へ左折する車の助手席の窓がするすると下り、「いつもありがとうございます」と保護者の方。学校には、このような「共鳴」の瞬間が幾つもある。難しい１年を越えてきたからこそ「これこそ学校」という瞬間が心に残る。



（定時制「卒業生を送る会」）

２月28日（日）は、定時制の卒業生にとっては最後の給食の日。卒業生のリクエストで味噌ラーメンが献立だった。この日、４年生は４月以来、おそらく初めて全員揃って給食を食べることができた。粋な「お別れ会」だ。共に何かを食べることは、きっと気持ちを合わせることと関係があるのだろう。「黙食」であっても、同じ空間で食事をすることには意味があるはずだ。私は高校時代、１日６食だったが、今は２食で十分。君たちは何食？



（全日制１年英語、show and tell）

☆

先輩たちの時代－80 周年の年に

・雑記帳　職員室への入室　「1 年〇組〇〇、〇〇先生にご用があって参りました」これが職員室に入る生徒のしきたりであった。（50 年誌）

・久保倉里美さん（51 期）陸上選手：私が陸上競技と出会ったのは、北高２年生の時でした。それまではずっとバスケットをしていましたが、自分にもっと熱くなれるものが欲しいと思い、思い切って陸上部の門を叩きました。（2007 年同窓会誌）

・森松桂一氏（41 期）：新入生が必ず通らねばならない伝統の儀式がありました。それは、先輩方

が内野のベンチのところに座っていて、１年生がセンターの位置で一人ずつ、クラスと氏名を言い、さらに好きな女の子の名前（北高生の中の）を叫びながらベンチ前へ全力疾走し、ヘッドスライディングをし、その後説教を受けるというものでした。（中略）それと国道淵で校歌を唱うという精神鍛錬です。（2001 年同窓会誌）



☆

水曜日ごとに、華道部が玄関前に花を生けてくれている。**朝、玄関に入った瞬間の第一感はとても大事だ。**先日は桜。関東ではすでに開花と聞く。去年の桜の時期は、君たちのいない校舎だった。今年は是非、校門左の桜に目を遣ってほしい。

☆

【この一冊】『ポストコロナ期を生きるきみたちへ』（内田樹編、晶文社）

「ウィズ」だとか「ポスト」だとか、言葉はともかく、収束後にどんな世界を創っていくかは私達に突きつけられた課題。**「椎名林檎になるための方法を教えてくれる学校はどこですか？」**と学生から問われた増田聡氏の巻が面白い。大学をそのような「能力のパッケージ」を学生に「インストール」するところと考える捉え方に疑問を投げかける。「まだ存在しない知を生み出すこと」が大学の存在根拠という主張は、私には当然に思えるが、世の中の捉えが変わったのだろうか。大学は就職の準備をする所ではない。ふと考えた。効率や合理性だけが世界を豊かにするのではないというメッセージが、ウイルスに込められているのだろうか。

☆

【たまに洋楽】『コンドルは飛んでいく』（サイモンとガーファンクル）

原曲はペルーの民族音楽。ポール・サイモンが詞をつけ世界的にヒットした。ただし、歌詞にコンドルは登場しない。

I'd rather be a sparrow than a snail
Yes, I would
If I could
I surely would
（かたつむりより雀になりたい　そうさ、もしできるなら、きっとそうする）

仮定法で would を使えば「（自分だったら）･･･するのだが」という意味。**「自分だったら」という想像力は重要。**話し合いの場で、他のメンバーに議論を任せ･･･などということなく、北高生諸君には「自分ならこう思う」「自分ならこうする」という“自分力”（そんな言葉があるかどうかわからないが）を発揮して発信してほしいと思っている。



（定時制調理実習、ピザ作り）

☆

「それだけあなたは幸せだったってことです」
「たしかに、社会の変動に自分の運命が翻弄されるなんてことはなかった。それを幸せと呼ぶなら、幸せは、私のような物事を深く考えない、他人に対する想像力の乏しい人間を作りやすいのかもね」
（「嘘つきアーニャの真っ赤な真実」、米原万里、角川書店）

新型ウイルスは、われわれから多くを奪ったが、立ち止まって考える機会を与えてくれたともいえる。過去、当たり前にあったものが無くなったとき、本当に大切なものは何か私達は真剣に考えた。そして、そぎ落として最後に残ったものに改めて感謝の念を深くした。先日、新聞局は今年度のポジティブニュースを掲載。**幸せは受け取るものではなく感じ取るものと再発見した。何でも手に入るのが当たり前の世の中であれば気づかなかった視点ではないか。私達は転んでもただでは起きない。**ウイルスとの綱引きは４月以降も続く。心してかかろう。

☆

渭城の朝雨　軽塵を浥す
客舎青青　柳色新たなり
君に勧む更に尽くせ　一杯の酒
西の方陽関を出ずれば　故人無からん

明日、終業式、そして離任式。